

福岡城の天守に関する新たな資料の発見について

今年度、福岡城の天守に関する資料について更なる調査・収集を進めていたところ、新たな資料を発見しましたので、お知らせいたします。

1 調査経過について

- 市博物館において、福岡城の天守に関する歴史資料の調査を行ってきました。
- 「天守」をキーワードに、以前調査した様々な資料についても再精査を行ったところ、以前、調査を行っていた、「福岡教育大学（波多野^{けんぞう}院三）収集資料」から、天守に関する新たな資料が発見されました。

2 成果について

（1）新たに確認できたこと（別紙 参考資料）

毛利家（母里太兵衛家）の資料から「天守」の建設と石垣に関する記述のある書状が新たに発見されました。

（2）資料の評価

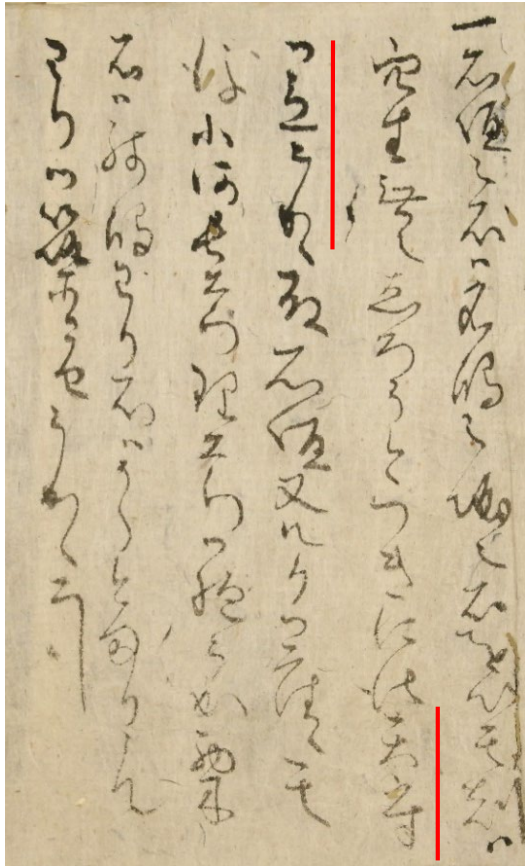
- 書状は江戸時代前期の1640～50年ごろのものです。
※1646年に描かれたとされる城内の絵図には天守は描かれていません
- 黒田家の家臣である梶原正兵衛が毛利甚兵衛（母里太兵衛の孫）にあてた書状で、黒田家の筑前入国直後の事柄について述べたものです。
- 両名は親・祖父世代が長政と同時代の人物と考えられ、記された内容は伝聞によるものと考えられますが、**福岡城築城を直接体験した世代から得た情報**であり、**信ぴょう性は非常に高い**と考えられます。また、天守台や周辺の石垣の観察結果とも齟齬は見られません。
- 毛利家という黒田家に近い立場の家臣の家に残されたという伝来の確かさや、江戸時代前期の黒田家の家臣たちが、天守が建てられていたと認識していたことが分かる**学術的価値の高い書状の発見**であり、**天守存在の学説をさらに補強する重要な資料**と考えられます。

【お問い合わせ先】

経済観光文化局博物館学芸課 担当：高山、長家
電話：092-845-5011 FAX：092-845-5019

【内容】

- ①福岡城の石垣については、名島城の石材を再利用した。
- ②工事の際には石積みの専門の技術者である「穴生（穴太、あのう）衆」がいなかったため、石垣は素人築きで築き、**天守を建てた**。
- ③その後は、残嶋（能古島）やからとまり（唐泊）の石を用いて築いた。



一石垣之石ハ名嶋之城之石を以、其刻ハ
穴生無之、しろうとつきに仕、**天守**
御立被成候故、石垣又ルク御座候、其
後小河長右衛門・理右衛門御抱被成、栗
石ハ残嶋、わり石ハからとまりにて
わり、御築させ被成候、已上

※書状の一部を抜粋

一石垣の石は名島城の石を使い、その時には（石工である）穴生衆^{（太）}がいなかったため、素人築きで石垣を築き、**天守をお建てになった**ので、（天守台の）石垣がぬるくなった。
その後は、小河長右衛門と理右衛門をお抱えになり、（石垣の内側に詰める）栗石は能古島、（石垣に用いる）割石は唐泊で割ったものを用いて石垣をお築きになった。